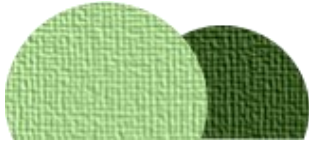


新・島根の中山間地から Work as Life

第8回

「訓練所の共同生活」

野中 浩一



1. 海外で井戸を掘る

JICA（海外協力隊）に行くと友人に伝えたところ、「アフリカで井戸掘るの？」と聞かれた。半ば冗談、半ば本気の言葉である。

私も、実際に JICA 海外協力隊に応募するまでは、友人とあまり変わらない認識を持っていた。しかし実際に募集されている専門職種は、「コミュニティ開発」「コンピューター技術」「野菜栽培」「マーケティング」「青少年活動」「障害児・者支援」など 180 を超え、派遣国もアジア、中南米、アフリカ、大洋州など多岐にわたる。

私は「社会学・文化人類学」の職種で、ベトナム中部の大学（ダナン外国語大学）に派遣され、現地の大学生に日本文化等についての講義を行い、現地の先生たちと一緒にカリキュラムや教材を改善する職務に就く予定である。

私の身近には、100歳の祖父、70代の母、そして妻と娘2人がいる。昔の言葉で言うところの「大黒柱」である私が、48歳で家族を日本に残して海外で単身2年間を過ごすことになる。それも会社からの辞令ではなく、自らの意志による選択としてである。一般的な観点からは、この選択はやや奇異に映るかもしれない。だが、私にとってこの挑戦は、これまでの20年に及ぶフリースクールの運営や対人援助の実践の延長線上にある、ごく自然な「Work as Life」の営みである。

2. 二本松訓練所という「隔離された共同体」

現在、私は福島県二本松市の山の上にある、JICA 海外協力隊の派遣前訓練の場にいる。4月21日に入

所してから約1か月が経ち、73日間の訓練期間もおよそ半分が過ぎた。一緒に学ぶ訓練生は137名。20代から60代までという極めて幅広い年齢層の男女が、ここで寝食を共にしている。

施設は、寮が併設された地方の公立大学を思わせる。近くの小さな町からも徒歩で30分ほど離れたその立地は、一種の「隔離された共同体」である。



写真1 訓練生の集合写真



写真2 語学学習の様子

※写真1と写真2は、二本松訓練所のfacebook（2026年4月22日、同年5月21日）より抜粋



写真3 訓練所外観



写真4 訓練生の個室

ここでの一日はなかなか過密である。朝7時の朝食に始まり、8時10分には全員が広場に集って点呼、連絡、国旗掲揚、ラジオ体操を行う。その後、午前から午後にかけて50分×5コマの語学授業をこなし、夕方には2時間の必修講座やオリエンテーションが組み込まれている。夜は17名前後の「生活班」ごとの点呼があり、23時に就寝となる。また、この時程の合間を縫って、自主講座や自学等が行われている。朝4時や5時に起きて自学や勉強会をする者、夜1時や2時まで自学する者もある。

私のような50手前の者からすると、日々ラジオ体操を行い、大勢で同じ釜の飯を食べ、規範や倫理観を注入されるこの生活は、どこか昭和の全寮制学校を思わせる懐かしさがある。一方で、昭和を知らない20代・30代の若者たちは、これをシェアハウスのような、イベント盛りだくさんの共同生活として楽しん

でいるようにも見える。同じ環境であっても、世代によって見えている景色は様々なかもしれない。

訓練所での生活は73日間であるが、その移ろいは早い。訓練所内の図書資料室や体育館やジム。はじめは賑わうが、間もなく電気が消えている時間の方が長くなる。金曜の夜や休日は、次第に熱を帯びる。新しい飲み処の開拓、山登り、温泉、ビール工場、会津や仙台など近場の観光地へのお出かけ。土・日の外出や外泊は、週を追うごとに増えていく。班のグループが活発になっているところもあれば、同じ語学のグループが活気づいている場合もある。一方で、こうした余暇のレジャーやイベントへの関わりを少なめに生活をする人もいる（主に中・高年層）。

訓練所の規律を守り、語学や講座への取り組みが疎かであれば、訓練中とはいえ余暇には自由が利き、多少羽目を外すことも容認されているように思われる。次第に恋話や即席カップルが、あちらこちらで芽生え始める。出会いを求め、刺激を求め、関係を育んでいく。訓練所は、そうした若者の青春装置、もしくは既に若者ではなくなった者の多世代型コミュニティとしても、機能している。



写真5 訓練所のマップ (<https://www.jica.go.jp/domestic/nihonmatsu/office/shisetsu.html>)

3. 「共感」を起点とした共同化

この濃密な集合訓練の意義を考える上で、経営学者・野中郁次郎が提示した『組織的知識創造理論』、とりわけその中核をなす『SECI（セキ）モデル』は有効な補助線となる。

野中は著書『日本型開発協力とソーシャルイノベーション』(※1)において、成功した国際協力事業の本質を「相手国に知を移転する一方向の支援ではなく、関係者と新たな知を共創した点」にあるとした。

そして、組織的知識創造のプロセスとして、①現場での直接経験から身体や五感を駆使して暗黙知を獲得したり共有したりする「共同化 (socialization)」、②それを言語化し、概念などの形式知へと変換する「表出化 (externalization)」、③表出した形式知をあらゆる知と組み合わせて体系化し、集合知や組織知としての戦略、理論、モデルを創造する「連結化 (combination)」、④体系化・理論化された形式知を、徹底的な実践を通じて身体化させていく「内面化 (internalization)」の四つのフェーズを提示している。加えて、「内面化で実践と内省が繰り返されることで、個人と組織の暗黙知がさらに豊かになり、次の共同化をいざなう」としている。

野中は、1990年代以降の日本企業における知的競争力の劣化要因として、「オーバーアナリシス (過剰分析)、オーバープランニング (過剰計画)、オーバーコンプライアンス (過剰統制)」を挙げ、それが人間の創造性の源泉である「野生」を劣化させてしまうと警告する。

対して、価値創造の鍵となるのは、SECIモデルの起点である共同化における「他者、モノ、環境すべてに対する共感」と「暗黙知」であるという。二本松訓練所が、あえて非効率とも思える全員一律の「集合宿型」を採用している理由のひとつは、まさにこの「身体と五感を駆使した共同化」によって、徹底的な対話を通じた「相互理解と共感の土台」となる暗黙知の獲得とその共有ではないだろうか。

4. 「仲良し」と「多様性」のジレンマ

訓練所における「共同化」の渦中で、ある興味深い問いに直面した。入所間もない頃、食事の席で生活班の班長(20代の若者)から、「どうしたら皆が仲良くなれるか?」「帰国後も同期会ができるような関係を築くにはどうすればいいか?」という問いを投げかけられたのである。

対人援助や社会学の視点からこの訓練所コミュニティを観察すると、そこには特有の集団力学が働いている。

訓練生活は学校の新学期と同じように、個々の仲間づくりからスタートする。訓練生の多くは、もともと気遣いやボランティア精神に富んだ「いい人」たちである。さらに「選抜された」という自覚と、今後も長らく関わりが続くという宿縁の感、そして訓練を乗り切れば海外派遣されるという共通のインセンティブが働いている。そのため、集団内には協調して規律を守ろうとする規範意識が高まりやすい。半面、そうした意識は集団において笑顔とポジティブな発言が膨らみやすい圧力にもなりうる。

社会学者のE・ゴッフマンは、その著書『集まりの構造』において、日常生活における社会的接触を規制する道徳律から生じる「社会秩序」のモデルを提示した。彼の視点を借りれば、訓練所で誰もが演じ

ている「過剰な調和」は、その場に集う全員のメンツを保護し、限られた期間を穏便に乗り切るために、全員が多大なエネルギーを投資して維持している「構造的な儀礼」そのものである。

しかし、授業や講座やイベントなどの構造化された「すること (Doing)」によって多様な関係を繋いでいるうちは良いが、ひとたび役割のないインフォーマルな時間、すなわち「いること (Being)」の時間が始まると、本当の関係性が露わになる。時が経つにつれ、集団生活による緊張、自己抑制による疲労、さらには生活習慣の小さなズレの積み重ねやふとした不協和によって、その精巧な舞台装置にヒビが入ることもある。慣れや疲れが見え始める中盤以降、人は安心を求め、年齢や趣味嗜好の近い者同士で居心地の良い「仲良し小集団」へと退却しがちになる。(※2)

これは自己防衛の本能として自然なことだが、国際協力の現場に赴くプロフェッショナルとしては、一つの罠になり得る。

マシュー・サイドの著書『多様性の科学』では、ビジネススクールでの興味深い実験が紹介されている。複雑な課題を解決する際、「画一的なグループ」はお互いに同意しやすく、終始気持ちよく話し合いを進め、自分たちの答えに強い自信を持った。一方、「多様性のあるグループ」では議論が紛糾し、反対意見も多く、メンバーは「大変だった」と感じ、自分たちの答えに強い自信を持っていなかった。しかし、高い確率で正しい成果を出したのは、後者の「大変だった」多様性グループであった。

ここで私たちが向き合うべきは、「学校の延長線上にある仲良しグループの心地よさ」に安住するか…①、それとも「異質性や不条理を内包するタフな集団への成長」を選ぶか…②というジレンマである。とはいえ、このジレンマは日常的には意識されにくく、訓練生活が進み少数での親密さが深まるほどに無自覚なまま①を選択する機会が増えていく点にも着目したい。決して仲良しグループが良くないわけではなく、その安心感や信頼関係を基盤として、集団の変化と相互理解を促進する動きを止めないことが肝要である。会っていることと関与していること、知っていることと理解していることは、まったく別ものである。

以上より、訓練開始から1か月が経った現在において「どうしたら皆が仲良くなれるか?」「帰国後も同期会ができるような関係を築くにはどうすればいいか?」という問いに、次のような言葉を添えたい(※3)。良くも悪くも訓練所の構造に適応した現状、それに伴い訓練生全体および班内に親密な小集団がいくつかできて“部分”が活性化している状態に対して、「もう一度この問いを、皆と自身に投げかけてみるのが有益かもしれない」と(=Alignmentのための目線合わせ)。

5. 協力隊の存在意義、私の存在意義

訓練所の中盤以降に試されるのは、まさにこのジレンマを乗り越えるための、「そのプロジェクトをなぜ行うのか、我々はなぜ存在しているのか」といった存在論的な目的への問いかけと、その共有である。

JICA 職員の講話の中で、特に印象的だった言葉がある。協力隊の本質は、相手国の人々が求めるものを通じて行う「心と心のふれあい」であるという指摘だ。そして、そのふれあいのために必要なのは相手やその歴史・文化への関心に基づく「自己理解や相互理解」、ボランティア・スキーム (※4) のための「信頼関係」づくり、さらに「心 (協力隊マインド)・技 (職種技術、協力手法、語学)・体 (行動体力と防衛体力)」の修養、加えて「セルフマネジメント」と「ねばり強さ」であるという。

任国 (派遣される国) で隊員が「外国人」として生活する中で経験するであろう、不便、孤独、そして不自由。それらをあらかじめこの二本松の地で疑似的に「共同化」し、異文化や異年齢の集団の中においてレジリエンス (粘り強さ) へと昇華させていくこと。これこそが、現在世界を覆っている複合的な危機に対して、幅広い連携とイノベーションをもたらす基盤となる。

現代社会が「インクルーシブ」や「多様性」を唱えながらも、一方で個人の孤立、地域や家庭の空洞化を深めているのはなぜか。こうした問いを頭の片隅に置きながら、現代社会から隔離された訓練所の高密度な関わりのなかに身を置き続けること。それは私にとって、島根の中山間地で行ってきた社会課題へのアプローチや生き方の探求と地続きの営みである。48 歳にして選び取ったこのベトナムへの挑戦もまた、私の「Work as Life」という生き方のひとつである。山を降り、海を渡るその日まで、私はこの密度の高い不自由さを、存分に愉しもうと思っている。

尚、以下の表 1～3 は、訓練所の生活をイメージするための参考資料である。

表 1 訓練所における活動一覧

	全体 (137名)	生活班 (17名前後)	語学クラス (4名前後)	その他
必須 (毎日)	・朝の集会、ラジオ体操、 国旗掲揚	・夜の点呼 (22:30まで) ・日直、食事当番、各委員 (図書委員、体力維持向上 委員、隊歌係、宅配便係) の選出と役務遂行	・語学の授業 (5h/1日)	・食事 (朝・昼・夜) ※土 日は任意
必須 (適宜)	・必修講座 (講話、講座、 オリエンテーション、語学 自習) ・振り返りシートの提出 ・ワクチン接種 ・所外活動 ・体力測定 (3回) ・隊歌斉唱	・班別ミーティング ・面談 (3回)	・在外拠点オリエンテー ション	
任意	・選択講座 ・よろず相談	・自主イベントや交流会等 の開催	・語学相談	・自主講座の開催及び参加 ・自主イベントの開催・参 加 (体育祭、文化祭など)

表2 必修講座（主に4・5月に実施された講座や行事を抜粋）

<ul style="list-style-type: none"> ・入所時オリエンテーション（訓練日程・スタッフ紹介・施設利用方法等） ・言語オリエンテーション、班長や各種委員、班別ミーティング ・避難訓練 ・体力測定 ・福利厚生・共済会オリエンテーション、講話 ・協力隊マインド・ワークショップ ・体力維持講座 ・コンプライアンスとハラスメント防止オリエンテーション ・処遇制度オリエンテーション ・アクティビティを活用したコミュニケーション技術 ・地球探求型所外活動オリエンテーションとグループミーティング ・任国での健康管理 ・オンデマンド講座実践計画 ・感染症 ・海外における安全対策 ・特別行事オリエンテーション ・異文化体験演習 ・海外における交通安全
--

表3 訓練所において実施された講座一覧（2026年4月21日～5月22日）

選択講座		（訓練生が自らの専門や特技を生かして行う）自主講座			
4月25日	第二言語習得講座	5月7日	LGBTQ+がいる世界で働くこと	5月25日	ダンス×ポジティブマインド！ ～自己受容できる自分になる～
4月30日	ラジオ体操指導員講座	5月17日	「ふつう」をアップデート～インクルーシブな社会をつくるために～	5月28日	妊娠・出産・赤ちゃんを知ろう！！
5月2日	映画「クロスロード」	5月17日	はじめてのドラマ！	5月26日	そうだブラジルに行こう。 ～多文化共生ってなんだろう。～
5月9日	効果的なプレゼンテーションと授業・講座設計	5月18日	グローバルプログラム～よそ者から仲間へ～	5月31日	好みのコーヒーの見つけ方
5月11日	スタッフ講座「イラン」	5月21日	農業の世界を"ちょっと"のぞいてみよう～野菜作り、お米、土について	6月2日	「児童相談所って何？」～難しい子どもとの関わり方～
5月13日	スタッフ講座「協力隊に参加する意義 JOCVヒストリー～半世紀の取り	5月16日	ヨガ講座（睡眠不足、消化不良の解消）	5月25日	KEMPS（集中講義）脳汁全開。究極の心理チーム戦トランプゲーム
		5月24日	馬駆ける南相馬へ！～相馬野馬追 Day Trip～	6月6日	ワークショップ手法を学ぼう！！ 『アイスブレイク、KJ法のハウ
		5月23日	生活に活きる剣道	6月2日	ヨガ② 星空ヨガ
		5月27日	Youは何しに協力隊へ？～その選択の裏にある人生観	6月6日	いつかきっと役立つ ロープの使い方
		6月13日	こらっせ！ふくしま いってみっぺ！浜通り	6月4日	世界とつながる授業づくり

<語句注釈>

※1 『日本型開発協力とソーシャルイノベーション』

JICAの日本型国際開発協力の7つの事例が、プロジェクトXのような分かりやすい物語りとして書かれている。その物語りそれぞれについて、直後に知的創造理論の観点から解説が書かれており、社会課題の解決や組織のチームビルディング、連携プロセスなど幅広く応用可能な著作である。

※2 「仲良し小集団」への退却

仲良し集団の色合いが強まると、所属集団と個人との感覚差や個人内での葛藤や矛盾（綱引き状態）が高まりやすい。また、無自覚に人を排除したり、敵が設定されてスケープゴートにされるなどの作用が生じ、集団内での死角が拡がると考える（これは学校等のクラス集団でもよく見られる作用である）。

当然ながら訓練生だれもが一様なわけではなく、さらに訓練を支えるスタッフや語学講師など異なる立場からの関与もあり、訓練所での関係バランスの再調整が適宜行われている。そうした中で、表面的な作法として訓練生同士お互いを受け入れていこうとする動きは継続されつつ（Doing）、一方で内面的には変化を厭い、居心地のよい指定席に落ち着こうとする志向が強まることで、関係の濃淡が日を追うごとに明らかになる（Being）。

私自身は、訓練所内で生じるこうした死角の影響（個人的な葛藤、摩擦、不調などフラストレーションの蓄積）は、管理された環境下ゆえに限定的であり、また可視化されやすいと考えている。しかし、この集団力学を任国での社会課題や、日本社会における格差・社会的弱者への作用へと想像力を拡大したとき、どうだろうか。実社会においてこの『死角』がもたらすインパクトは極めて大きいにもかかわらず、その実体や全体像は見えにくくなるのではないだろうか。

※3 次のような言葉を添えたい

本文では一般論を交えた意味合いで言葉を添えている。訓練所の実態でいえば、この問いを投げかけた班長は仲間達との日々の試行錯誤の中で、班や年代を越えた試みを実践し続け、成果を出している。

※4 ボランティア・スキーム

短い期間に対話を重ねて、目標・計画の合意形成を行うとともに、隊員の帰国後も技術が継承されて現地の人が自ら活動を継続していける仕組みづくり（「あなたにもできるよ。仲間がいるよ。」の体现）のこと。それは単なる技術移転ではなく、相手と共に汗をかく伴走の姿勢として、山本五十六の言葉「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」を用いることがある。

実際に協力隊として任国に派遣されてから、任地では「①知識・技術の移転、②仕事に対する姿勢の伝播、③相互理解の醸成」が行われる。また隊員は「①モノの有難さや工夫の余地、②家族の大切さ、③幸福感や自己の成長」といった刺激を受け、変化を促される。さらに国際交流としては「①途上国に日本ファンが増え、②日本国内に途上国ファンが増える」といった結果が生じる。つまり、協力隊の仕組みが機能した際には、世界各地で恩返しや恩送り（誰かから受けた親切や恩恵を、別の人に送っていくこと）の連鎖が想定される。

<引用・参考文献>

- E・ゴッフマン著 丸木恵祐・本名信行訳（1980）『集まりの構造 新しい日常行動論を求めて』誠信書房
マシュー・サイド著（2021）『多様性の科学 画一的で凋落する組織、複数の視点で問題を解決する組織』
ディスカヴァー・トゥエンティワン
野中郁次郎（2024）『日本型開発協力とソーシャルイノベーション 知識創造が世界を変える』千倉書房
JICA 海外協力隊のホームページ <https://www.jica.go.jp/volunteer/>
二本松訓練所 facebook https://www.facebook.com/jicantc/?locale=ja_JP